

# 『落日の宴』に理想の組織人を見る



東京ガス会長  
経団連雇用政策委員長

うちだ たかし  
内田 高史

川路聖謨をこ存じだろうか。勘定奉行として日露和親条約を締結した人物、日本で初のピストル自殺した人物、として記憶されている方も多いことと思う。

私は、吉村昭著『落日の宴』を通して川路を知った。著者が「川路は幕末に閃光のようにひとときわ鋭い光彩を放って生きた人物」と記している通り、私自身も川路の人間性、頭脳、生きざまに深い感動を覚え、「心に残る歴史上の人物」の筆頭としている。

川路は、大分の軽輩の家に生まれた。少年期に江戸に出て養子となり、幕府に勤め、以降、幕府の要職を歴任し、勘定奉行へと昇りつめていく。おごることなく質素儉約に努め、体を鍛え、洋学の才との交わりによって開明的な思想を得ていく。

ロシアとの交渉にあたり、国境画定要求に対して「一寸の土地でもロシアに与えれば幕閣は総辞職、自分も切腹」との悲壮な決意のもとに交渉に臨む。一方で、洋学に親しんだことや、貿易港の開港をめぐって、蛮社の獄に列せられる恐れや、攘夷の嵐に巻き込まれる危険も増していく。このような命を懸けた交渉にあつて、交渉相手プチャーチンをして、「川路は非常に聡明であった。彼の一言一句、一瞥、それに物腰までが、すべて良識と、機知と、炯眼と、練達を顕している」と言わしめている。交渉のただ中に起きた大地震にも的確に対応し、難破したロシア船と兵士の救済を指揮し、和親条約締結に至る。その後、通商条約締結の動きの中では、諸大名の意見を統一し、朝廷の勅許

を得るために奔走する。また、諸外国に追い付くには教育が必要だとして、洋学所の設立に尽力する。

職務について合議が必要な場合は、まず、「確固とした意見を持ち、そのうえで多くの者の意見を聞くべきで、衆議に身を任してはならない。ただし、一旦衆議に従った以上は、自分の意見に固執してはならない」と説く。まさに組織の長としての心構えである。部下や家族に優しく、妻を大切にするさまは、なかなか見習えるものではない。

最後は將軍継承問題に巻き込まれ、左遷の憂き目に会う。晩年は中風を患う中で、討幕軍が江戸に迫っていることを耳にし、「幕府の消滅は自分のそれでもある」として、割腹のうえ、ピストルで自殺する。まさにラストサムライである。

この小説は、固い信念とあふれる人間性を持って、内憂外患の日本を救った人物を、極力フィクションを交えずに描いた傑作である。川路聖謨は、理想の外交官かつ、傑出したリーダーであった。



著者：吉村昭 発行：講談社